

様式E 終了時評価表

<b>1. 案件の概要</b>	
事業名（対象国名）：ムカラバ地域におけるインタープリテーション手法を用いた地域参加型エコツーリズム開発（ガボン共和国）	
事業実施団体名：一般社団法人エコロジック	分野：生物多様性保全
事業実施期間：2017年7月～2020年6月	事業費総額：56,288千円（税抜）
対象地域：ムカラバ・ドウドウ国立公園周辺	ターゲットグループ：ムカラバ・ドウドウ国立公園周辺のドウサラ村を含む住民とPROGRAM職員、ANPNのエコガイド
所管国内機関：中部センター	カウンターパート機関：地域NGOのPROGRAM（PROGRAM）、ガボン国立公園機構（ANPN）
<p>1-1 協力の背景と概要</p> <p>ガボン共和国（以下「ガボン」という。）は、広大な熱帯林の広がるアフリカ中央部のコンゴ盆地に位置し、国土の80%以上の高い森林率を有する生物多様性に富んだ国として知られている。ガボン政府はこの豊かな生態系の保全に取り組むべく、2002年に国土の11%に当たる13か所を国立公園に指定した。また、2009年に発表された環境政策Gabon Vert（以下「緑のガボン」という。）のもと、国立公園を適正に管理し、保全された自然を利用するエコツーリズム開発を推進している。</p> <p>本事業の対象地域のムカラバ・ドウドウ国立公園（以下「ムカラバ」という。）は13ある国立公園の1つで、絶滅危惧種であるゴリラをはじめとする大型哺乳類の貴重な生息地として知られている。ゴリラ保護や生態研究等のために海外からの援助がある一方で、ムカラバ周辺地域の住民の生活水準は決して高いものではない。このような状況を踏まえ、地域住民の生活を向上させるために、住民自身が地域の自然や伝統文化を守り、住民の知識や文化そのものが価値となる地域参加型エコツーリズムの導入が必要とされてきた。</p> <p>本事業では、先行事業で行ったエコツーリズム指導者や住民ガイドの育成、観光資源の発掘などの成果をもとに、ムカラバでエコツーリズム事業が継続的に実施されるために、事業の実施体制の構築やビジターセンターの整備、モデルツアーの開発などを行うこととした。</p>	
<p>1-2 協力内容</p> <p>(1) 上位目標：</p> <p>ガボン政府によって今後導入されるムカラバ国立公園におけるエコツーリズム事業において、対象地域の住民が主体的に関わり、インタープリテーションに基づく</p>	

自然ガイドや文化観光プログラムを提供し、エコツーリズム事業から経済的、文化的、精神的利益を享受しつつ、持続可能な生活様式を実現する。

(2) プロジェクト目標：

地域住民が制作した自然や伝統文化の保全を目的とした観光商品を、住民による観光振興グループが地域 NGO と協働して観光客に提供し、ムカラバ国立公園におけるエコツーリズム事業が持続的に実施される。

(3) アウトプット：

- ① 地域住民による観光振興グループが形成され、地域 NGO と連携してエコツーリズム活動を継続的に実施し、観光客を受け入れる体制が確立される。
- ② 土産品の開発やエコツアーで使用する解説用資材の制作を通して、地域住民が現存する自然や伝統文化の価値を再認識し、観光客のニーズに合わせた観光商品作りの技術を習得する。
- ③ 国が要請するエコガイド研修を受ける前段階の基礎知識を習得した住民ガイドが育成され、地域住民、エコガイドと連携し、住民を巻き込んだ自然や伝統文化に関する観光プログラムを実施できるようになる。
- ④ エコツーリズムに関わるガボンの関係機関による協議会において、ムカラバ地域におけるインタープリテーション手法を用いたエコツーリズム開発の情報が維持される。

(4) 活動：

① 観光振興グループづくり

- 1-1. エコロジックの専門家と現地指導員（カウンターパート機関の地域 NGO、国立公園局の行政官、科学技術研究センターの研究員）が、地域住民を対象に観光振興グループ形成のためのワークショップを行い、構成員、役割、連携体制、マネジメントシステムを確立する。
- 1-2. エコロジックの専門家と現地指導員が、地域住民を対象に、地域文化と野生生物を適切に保護しながら観光客を受け入れるためのガイドライン作りのワークショップを行う。

② 観光商品作りを通じた技能研修

- 2-1. 先行事業でインタープリテーション指導者として育成された現地指導員のうち2名が、エコロジックの専門家と建築の専門家によって実施される訪日研修において、解説用資材の制作技術とその指導方法を習得する。
- 2-2. エコロジックの専門家と 2-1 で技術を習得した現地指導員が、地域住民を対象に、土産工芸品や解説用資材（エコツアーのルートに設置するサインボード、エコツアーマップ、伝統建築物、コミュニティセンター、エコツアーのために活用するハンズオン資料、展示物など）の制作ワークショップを行う。

- ③ 地域住民と連携しながらエコツーリズム事業を実施するための技術研修
- 3-1. エコロジックの専門家と現地指導員が、先行事業で育成された住民ガイド 10 名のうちの若者に、国が要請するナショナルガイドコースを受けるための基礎知識を習得するための研修を行う。
  - 3-2. エコロジックの専門家と現地指導員が、国が養成したエコガイドと住民ガイドが連携し、住民を巻き込んだエコツアーの実施方法を習得するための研修を行う。
  - 3-3. エコロジックの専門家と現地指導員が、地域住民の年配者対象にキャパシティビルディングのための研修を行う。
  - 3-4. 実際に観光客対象のテストツアーを行い、3-2&3-3 の演習を行う。
  - 3-5. エコロジックの専門家と現地指導員が、住民ガイドを対象としたワークショップをおこない、住民によるツアーを提供する際の実用的なガイド用観光プログラム・マニュアルを作成する。
- ④ ムカラバ地域のエコツーリズム活動の普及・啓発と協議会の設置
- 4-1. エコロジックの専門家が、他の国立公園保護官、関係省庁、観光会社、国際 NGO、地方行政官らを対象に、ムカラバ地域における取り組みを紹介し、インタープリテーション手法を用いたエコツーリズムの有効性を解説するためのワークショップを行い、関係機関が定期的に行うことのできる協議会を設置する。
  - 4-2. エコロジックの専門家が現地指導員と協力して、他の国立公園保護官、関係省庁、観光会社、国際 NGO、地方行政機関などを対象に、3-5 で作成した観光プログラム・マニュアルを活用しながら、ムカラバ地域におけるエコツーリズム活動の普及啓発を目的とした現地視察を行う。
  - 4-3. エコロジックの専門家と現地指導員が、ムカラバ地域のエコツーリズム開発において観光客を受け入れるためのガイドライン提案書を作成し、関係機関に提案する。

## 2. 評価結果

### 妥当性 (Are these the right things to do?)

以下の観点から、妥当性はおおむね高いと評価する。

#### 【政策やニーズとの整合性】

ガボンには生物多様性の高い広大な熱帯雨林を有し、国土の 11% に相当する面積を国立公園に指定するなど、国家政策として生物多様性保全を推進している。緑のガボン政策では、自然を消費する従来の観光から、保全された自然を観光資源として利用するエコツーリズムへの転換が打ち出されており、本事業は政策に合致している。また、日本の対ガボン共

和国別開発協力方針（2019年4月）では、重点分野の1つとして環境保全をあげており、エコツーリズム振興への取り組みを支援する方針とも一貫性がある。

**【ターゲットや対象地の適切性】**

対象地域のムカラバは13ある国立公園の1つで、絶滅危惧種であるゴリラが生息しておりエコツーリズムによる開発可能性の高い地域である。ゴリラ保護や調査のために京都大学が研究拠点を置くなど、海外の研究機関に雇用されゴリラ等に関する高い知識を習得した住民がいた一方、多くの住民は仕事を求めて出稼ぎのために都市部へと流出しており、地域資源を生かして雇用を生み出すエコツーリズムの推進はこの地域の実情とも合致していた。

他方、ムカラバは、首都から車で半日以上、最寄りの町からも2時間程度とアクセスが悪いため、人付け（餌を使わずに長期間追跡することによって人間への警戒心を取り除き、人間の前でも自然に行動できるように慣らすこと）によってゴリラ観察が高い確率で保証されてから事業を開始するとより高い効果が得られたと思われる。

**【計画・アプローチの適切性】**

先行事業でムカラバ周辺地域の住民がエコツーリズムを理解し、開発を肯定し、住民ガイドとして育成された。その後住民が主体となってエコツーリズム事業を推進していくために、本事業で住民グループ組織の設立や地域を総合的に案内するビジターセンターの整備などを計画し、住民の主体的参画を促したことは適切であった。

また、先行事業から引き続き実施したことで関係性が強固に保たれ、活動への理解や協力が得られやすくコロナ禍においても最後まで事業が実施された。

**実績とプロセス(Are we doing what we said we would do?)**

以下の観点から、実績とプロセスの評価は中程度と評価される。

アウトプット1：地域住民による観光振興グループが形成され、地域 NGO と連携してエコツーリズム活動を継続的に実施し、観光客を受け入れる体制が確立される。

地域住民10名以上が構成する観光振興グループの設立を目指しており、事業終了時には32名が所属し、総会や会議が定期的実施され活動を継続している。グループ設立前から規約について住民と話し合いを続け、定款を定めるとともに、内務省に提出し NGO 登録も行った。

以上のことからアウトプット1の成果は指標を上回るものであった。

アウトプット2：土産品の開発やエコツアーで使用する解説用資材の制作を通して、地域住民が現存する自然や伝統文化の価値を再認識し、観光客のニーズに合わせた観光商品作りの技術を習得する。

訪日研修で2名が観光商品作りの指導方法を習得し、住民を対象に土産品や解説用資材の制作技術を指導した。結果、女性5名を含む21名の住民が制作技術を習得した。新たに開発された土産品は8点あり実際に観光客への販売も開始された。また、ビジターセンターを設立することによって、作成した8点の解説用ツールや土産品を定常的に設置することができ、いつでも観光客を受け入れる体制が整った。エコツアールートは確立されたが、マップについては日本で作成したため技術移転の観点からも現地で作成するべきであった。

以上より、アウトプット2の成果は指標に達しているが、より工夫することでさらなる効果が見込まれた。

アウトプット3：国が要請するエコガイド研修を受ける前段階の基礎知識を習得した住民ガイドが育成され、地域住民、エコガイドと連携し、住民を巻き込んだ自然や伝統文化に関する観光プログラムを実施できるようになる。

国が実施するエコガイド研修が実施されず、研修受講のための基礎知識の習得はできなかったことから、補完できるように活動計画を修正するべきであった。他方、住民ガイドは10名育成され、全員がテストツアーや観光客の対応を通してプログラムの準備や実施方法を習得した。ガイド向け観光プログラム・マニュアルの改訂は終了し、コロナ禍により紙媒体での配布ができずデータで配布した。

以上より、アウトプット3は中程度達成された。

アウトプット4：エコツーリズムに関わるガボンの関係機関による協議会において、ムカラバ地域におけるインタープリテーション手法を用いたエコツーリズム開発の情報が維持される。

エコツーリズム・ワークショップは計4回実施され、のべ40人が参加した。コロナ禍により中止となった最後のワークショップでエコツーリズム開発の有効性理解度を計る予定であったため明確な数字が出ていないが、4回の実施状況から多くの参加者が理解していたようだった。

事業終了間際に予定していた関係機関による協議会が設置できず、それに伴い協議される予定だったムカラバの取り組みを踏まえた地域参加型観光開発のためのガイドライン提案書も発行されなかった。他方、実施団体は最終報告書を作成し、提言を盛り込みガボンの各関係機関に配布することでガイドラインの一助とした。

以上より、アウトプット4の達成度は中程度であるものの、コロナ禍がなければ達成されていた可能性が高い。

#### 【人的投入】

人員について、日本からは先行事業に引き続きプロジェクトマネージャー、専門家、ガ

ボン駐在の現地業務調整員が配置された。計画通りではあったものの、現地に常駐する業務調整員がエコツーリズム開発にも通じていれば、さらなる効果が見込まれたのではないかと思われる。また、ガボン側のカウンターパートは、地域 NGO の PROGRAM や国立公園機構であったが、エコツーリズムによる住民生活向上のためには、観光関連の機関もカウンターパートとなって人材が投入されたら、より効果が大きかったと推測される。

#### 【機材投入】

ビジターセンター建設のために調達した発電機等の機材は、建設終了後にカウンターパート機関 ANPN に引き渡され、ムカラバ地域住民がエコツーリズム事業継続のために使用されている。ビジターセンター本体は、研修の一環として住民自身によって建設され、今後も住民によって管理されていく。

#### 効果 (Are we making any difference?)

以下の観点から、現状の効果は中程度であると評価される。

指標としていた観光振興グループは、事業終了時に目標 10 名を上回る 32 名の住民が所属する団体となった。役員や定款も定まり、総会や定期的な会議が開催されるなど組織体制が確立され、活動が継続されている。グループが提供した観光プログラムのうち、最も観光客に利用されたのは伝統ダンスで、2019 年 1 月から 12 月までにムカラバを訪れた観光客 117 名のうち 72 名 (61.5%) が利用した。その他のプログラムを利用する観光客はほとんどいなかった。また、ビジターセンターを利用したのは全観光客のうち 19 名 (16.2%) であったが、これはセンターを一般に開放し始めたのが 2019 年 8 月からと日が浅く、周知しきれなかったためだと考えられる。

一方、プロジェクト目標である「ムカラバでエコツーリズム事業が継続的に実施される」に関しては、ビジターセンターを地域住民の村の中心部に設置したこともあり、地域住民がエコツーリズム事業に対して主体性を持って取り組む様子が見られた。今後も観光客が来た際には地域住民自身が積極的にエコツーリズムを推進していくことが期待される。

#### 持続性(How sustainable are the changes?)

以下の観点から、持続性は中程度である。

地域住民で成り立つ観光振興グループが結成され、会議が定期的に行われビジターセンターが管理されるなど、住民のエコツーリズム事業に対する意欲は高い。コロナ禍により予定されていた最終渡航ができず、また現地業務調整員も早期に日本に帰国することとなったが、現地業務調整補佐員のサポートや地域住民の協力で事業を完了できたことから持続性は高い。

一方で現在は、コロナ禍の中で観光客が増えずエコツーリズムを実施できない厳しい状況に置かれている。育てた人材が流出しないためにもムカラバへのさらなる観光客の呼び込みが必要となる。観光振興グループが主体となって、関係機関や旅行会社と連携し、観光客の受け入れ再開のための準備を行うことが期待される。

### 3. 市民参加の観点からの実績

本事業の実施により、実施団体は、関係機関とのコミュニケーションや交渉などを通じてプロジェクト・マネジメント能力を強化することとなった。特に、事業計画策定、阻害要因に対する対処方法、ファンドレイジング、事業評価などにおいて経験とノウハウを蓄積した。

また、実施団体は、以下のとおり様々な場所で本事業に関する発信を行い、ガボンと日本双方で新聞記事に取り上げられるなど、市民の国際協力への理解促進に大きく寄与した。

- ・福島で一般市民や研究者を対象にブース内で事業の展示を行った。
- ・静岡県立大学で JICA 関係者を対象とした事業紹介を行った。
- ・富士宮で一般市民を対象とした事業紹介のパネルを展示した。
- ・JICA 北陸で技術協力事業関係者を対象に事業を紹介した。
- ・京都大学で研究者を対象に事業の中間報告をした。
- ・JICA 中部で一般市民を対象にシンポジウムを開催した。
- ・静岡新聞のインタビューに答え、事業紹介が掲載された。
- ・訪日研修終了後にガボンで参加者へのインタビューが行われ、国内のテレビと新聞で紹介された。
- ・ムカラバのエコツーリズムと事業についてガボンの新聞で記事が掲載された。

### 4. グッドプラクティス、教訓、提言等

#### 【グッドプラクティス】

・住民に地域の魅力を再発見させるインタープリテーション手法を用いたエコツーリズム開発を進めたことで、住民自身が伝統文化を継承し自然を保護することの意義を見つけ、自主的に事業に取り組むようになった。地域住民の理解を得てこそ成り立つエコツーリズム開発において重要なポイントといえる。

・主なカウンターパートとしていた地域 NGO の PROGRAM が途中から余り機能しなくなったものの、実施団体の経験に基づき上位組織である国立公園機構を当初から関与させていたことで、問題なく事業を続けることができた。

#### 【提言】

・観光資源の発掘、地域住民の理解と協力、モデルツアーの開発、と観光開発の基礎は終了させたものの、持続性に必要不可欠の観光客の呼び込みまで至らなかった。より早い段階から関係機関と覚書を締結し、連携して観光客の積極的な誘致を図る必要がある。

・ゴリラをシンボルとしてエコツーリズム開発を進めるのであれば、ゴリラ観察が一定以上保証されてから事業を進めることがより有効であったと考えられる。